追悼

竹内　峯 先生　逝く

中村泰久（福島大学人間発達文化学類）

本会の副理事長も務められた東北大学名誉教授竹内　峯先生が，去る2月18日に入院先の病院で亡くなられた（享年79歳）．ご葬儀は翌週，近親者を中心に二本松市の菩提寺で営まれた．また，4月末には仙台市内で「竹内　峯さんとのお別れ会」が開かれ，多くの関係者が集った．

先生は，1932年に福島県福島市にお生まれになり，その後は専ら仙台市でお過ごしになられた．東北大学理学部に入学後は，恩師の一柳寿一先生の指導を受けつつ恒星物理学を学ばれ，1955年に学部を卒業，1964年3月には同大学院博士課程を修了された．その後，1966年に同大学理学部助手として採用され，助教授を経て1988年4月に教授となられた．

大学教員時代には，脈動変光星をご専門として研究され，同時に多くの学生，院生を指導された．また，学部改革などの大学の管理・運営にも大きな力を発揮された．その中で，京都大学上杉明氏との共著で「基礎天文学」という教科書を出版されたほか，教養課程の講義ために「宇宙の探究」という冊子なども書かれている．

先生のご研究の中心は恒星の脈動理論で，特に代表的な脈動星であるケフェウス型変光星については数多くの仕事をされ，世界的にも活躍されてきた．先生ご自身は理論研究家で，理論家には観測面に疎いタイプと観測面にも明るいタイプがあるが，先生は間違いなく後者であった．観測データの見方，まとめ方などは周りの者にとってもたいへんに参考になるものであった．先生の研究過程の中で，カオス理論を変光星研究に持ち込まれたが，そのきっかけは，昼食後に立ち寄った大学生協の書籍コーナーで偶然手に取ったカオス理論の本であり，立ち読みしたままの食後の時間で大きな着想を得たというお話を伺った．

この間，国際研究会も複数回組織され，また研究会集録の編者ともなられている．特に，地元仙台での国際研究集会では，その資金集めをはじめとする諸準備から集録の編纂に至るまでを，後続者たちに間近で経験させてみるというご配慮もされた．

竹内　峯先生

上に記したとおり，ずっと東北大学天文学教室に奉職されており，筆者が3年に進学した際にはすでに助手として勤務されていた．長年，教室は基本的に2講座教員7名のままであったが，その後，教室は教授だけでも5名になるなどずいぶんと大きくなった．このことは在職時代のご努力のたまもので，ちょっとご自慢のようでもあった．

また，東京天文台を母体として国立天文台が設立され，国立大学共同利用機関として船出していく段階に運営協議員としてさまざまに尽力されもした．「これがもしかすると自分の日本の学界への一番の貢献かも」と後に半分冗談めかしておっしゃっていたこともある．

1996年3月に停年退職された後も，東北大学百年史編集委員や同窓会などのさまざまな活動にかかわってこられ，人とのつながりを大事にされつつ，研究への情熱は一段と高められたようで

あった．ご自分で「柳町研究所」をおつくりになり，いつまでも共同研究をなされた．この中で特に，ニュージーランドに設置された望遠鏡による名大「MOA計画」にもご停年直前から参加されて，その後もずっとマゼラン星雲における変光星観測などに積極的に取り組まれ，他大学の多くの若手研究者との共著の論文をいくつもものにされたことは記しておくべきことであろう．

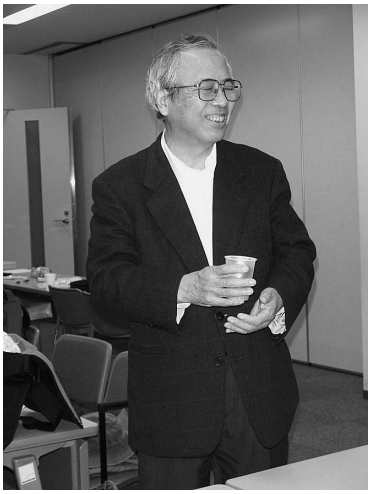
学会関係でも，学会として編纂した「日本の天文台の百年」の執筆者のお一人でもあった．

先生はがんばる者には分け隔てなく接してくださる温かいお人柄で，周りの人たちはよく“峯さん”と呼んだりしていた．峯先生は，国際的なご活躍をされる傍ら，いわゆる関心あるアマチュアの方々とのつながりを大事にされ，垣根をはらって親しく接しておられたというお姿が心に残る．

私たちが行ってきた「連星系研究会」が「連星・変光星研究会」へと発展したあたりから，いろいろサポート，あるいはご自身で参加して私たちをいろいろな意味で指導してくださった．写真はそのような折りの一コマである．また，いくつかの関連する研究分野のメイリングリストには，亡くなられる間際まで，たびたび適切なコメントを寄せられていた．

このようなお姿の一環は，ご停年後に「変光星ノート」を執筆され，オープンな形で遺されていることにも表れていよう．これは，No. 1「脈動変光星の発見」（2008 Jan. 18）からNo. 10（2008 Sept. 10）まであり，今でも西はりま天文台（兵庫県立大学天文科学センター）のウェブサイトから取得可能である．先生は生前，その国の学問水準は，結局，その母国語で書かれた読みやすい本があるかどうかで決まるのではないかという旨のことを話されていたが，それをご自身で実践されたということであろう．

先生のご生涯はただ一大学の教員，天文学者としてだけではとても語り尽くせず，社会問題や大学・高等教育の問題全般についても一貫していろいろお考えになり，また，実践されてこられた．ここは学会誌であるので詳しく述べるゆとりはなく，これをきちんと記すにはどうしても別の一章が必要であろう．



研究会の休憩時にて（2003年郡山市）．

もう一つ，これはとても片手間などではなく，きわめて大事な仕事として認識されていたのが保育所の経営であって，大学の働く人たちなどにとってたいへん意義ある事業であった．在職時の1982年から社会福祉法人を設立され，その理事としてがんばってこられたが，ご退職後にはいっそう力を入れられていた．いろいろな保育園の経営が厳しくなっている中で，さまざまな工夫によりしっかりした経営を実現され，規模も拡大されていった．晩年は，たくさんの子どもたちにとっては良きおじいちゃんで，先生ご自身にとってはたくさんのかわいい孫たちに囲まれているご気分だったのではと想像する．

このように，先生のご生涯はとても一人で紹介するには荷が重すぎ，近くでいろいろ教えを請うてきた身としては，まさに“巨星墜つ”的な感がして，虚脱感も大きかった．ここでは先生のご業績の過半の概要は何とかかろうじてご紹介できていることを念じつつ，追悼の文章を閉じたい．